

英語動名詞再考⁽¹⁾

村 田 忠 男

1. 序 論

現代英語の動名詞に関する研究は、70年代の中頃までに比較して、最近目立たなくなっているように思われる。動名詞に関する研究が既に充分行われたからだというふうには、しかしながら、考えられない。that 補文や for to 構文との関係、さらには、逆に名詞句との関係についても、かなりの論文が発表されてはきたけれども、掘るべき文法理論自体の流動性や未完全性の故に、また、動名詞用法自体が母国語話者の間で必ずしも安定したものになっていない面があることなどから、動名詞に関する議論は結着をつけるにはまだ到っていないと考えられる。

歴史的に見ると、動名詞の起源は、本来 OE の弱変化動詞から作られた動詞的名詞 (Verbal Noun) に遡るが、どんな動詞でも用いられるようになったのは14世紀頃からで、以後、16世紀になると not が付加できるようになり、完了形 *having* が登場し、17世紀になると受身形が可能となり、さらに、「動名詞付対格」構文も、Jespersen, Van Del Gaaf, Curme などによる種々の議論はあるものの、18世紀頃には存在したようである。このように英語史の面から見ても、動名詞の動詞的性質が強まったのは、そんなに古いことではなく、従って、現代の英語を眺めて、かなりの多様性、不安定性が見られるのは当然と言えるかもしれない。

1960年代の変形文法に於ては、動名詞構文は補文の一種として文からの変形によるものと考えられていた。しかし Chomsky (1970) や Wasow and Roeper (1972) などは、文からの変形による動詞的動名詞と、内部構造も名詞であると考えられる名詞的動名詞に分けて考え、この方式がしばらく行われたが、Horn (1975) は、「動名詞付対格」構文のみを文からの

変形によるもので、他の動名詞は全て名詞的であるという提案を出した。Schachter (1976) も、Horn と同様、動名詞付対格だけは、文からの変形によるとする考え方の可能性を認めるものの、しかし、もしかすると、動名詞構文は全て、文からの変形によるものではないとする可能性の高さについても主張している。つまり、変形文法理論の変遷の中で、動名詞構文は全てもともと文であるとする考え方から、全て文ではないとする考え方まで、一通り登場したのであった。

その後、動名詞構文を論考の中心とする論文は、私の目には入っていないが、最近よく取りあげられている助動詞の議論に関連して、動名詞の位置づけに関する言及も多少見られる。Akmajian, Steel and Wasow (1979) は、(1)の例に見られるように、have-en と be-ing が不定詞構文、動名詞構文の両方に出現するところから、V³ レベルで両方とも導入するよう提案している。

- (1) a. For you to have been reading the private diary (was rude).
 b. Your having been reading the private diary (was rude).

彼らの Vⁿ 分析に対しては、有村 (1980) の反論があるし、1980年5月の日本英文学会での「助動詞」シンポジウムでも、岩倉などが批判をしているので、ここでは深入りしないが、動詞句らしさに段階のあることを認めた方式である点に注目したい。つまり、Kajita (1968) や Williams (1975) などに既に文や動詞句に階層のあることを認め、それを基底構造に反映させようとしていたのと、発想の方向としては同様であると言えよう。こういう文らしさや動詞句らしさの階層をさらに数多く設けていくと、結局は、Ross (1973) の連続文法の考えになっていくわけである。Ross の考えは、一部に共鳴者があり、しばらくの間、文法の連続性を示す論文が出現したが、最近では鳴りをひそめているというのが実状であろう。⁽²⁾ しかしながら安井 (1975) がはしがきで「おそらく、言語は、本来、非連続なものであり、しかしながら、非連続でない部分をも含んでいる、というのが真理に近いのではないかと思われる。」と述べているように、言語には、やはり連続的な部分があるというのは事実であろう。動名詞構文に関しては、ま

さに、このような連続的部分が存在していると考えられるのである。本稿では、変形文法家達が提案してきた種々の立場のうちの特にどれかを採用するという訳ではなく、依然、結着のつかないまま不安定な状態の続く動名詞の姿を、従来の研究を利用しながら、その連続的側面にスポットを当てていくことにしたい。

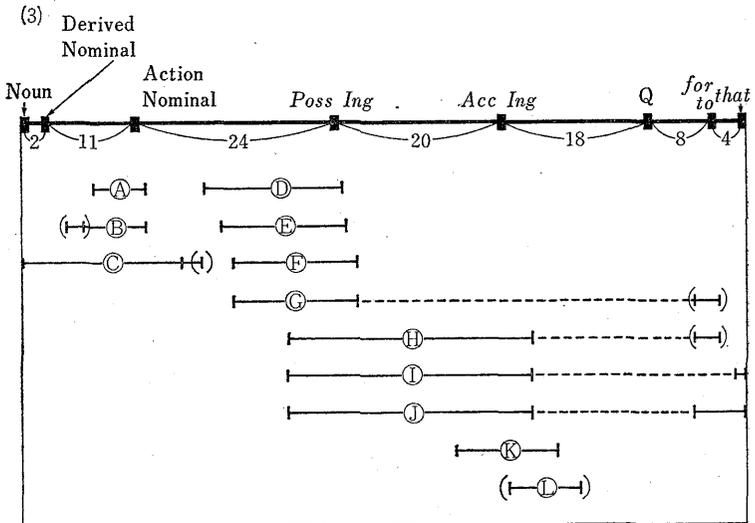
2. 動名詞の分類

理論的にも、データの的にも問題点が含まれているとは言われているものの、Ross (1973) の連続文法の考え方は、動名詞のように多機能化した構文の見通しをつけるには、やはり、便利であると思われるので、文らしさの増える順に8つの範ちゅうを彼に従ってあげておこう。

(2) Noun <Derived Nominal <Action Nominal <Poss Ing <Acc Ing <Q
<for to <that

次にあげる(3)は、それらの範ちゅう間の距離を知る目安として、Ross のテスト結果一欄表に於いて、それぞれの範ちゅうの間に容認性の差違が感じられる場合のテストを集計した数を加えてある。左から2, 11, 24... というのがそうであり、派生名詞 (Derived Nominal) 名詞的動名詞 (Action Nominal or Nominal Gerund) 所有格動名詞 (Poss Ing), 動名詞付対格 (Acc Ing), Q (WH を持つ補文) との間は、差違を示すテストが多数存在していることがわかる。たとえ、*idiolect* による差違をかなり認めたとしても、なおかつ、一応の目安となっているものと思われる。(for to というのは、不定詞構文で、that は that 節のことである。)

8つの範ちゅうの下のAからLまでの実線は、Ross の文らしさの度合いの表を、一応、妥当と認めた場合、それぞれのグループをなす動名詞用法は、大体どの辺に位置するかを示したものである。グラフのうち、() に囲まれた用法は、個人差が比較的多いと思われるものである。また、破線部分は存在の証明がなされていないところである。ロス の表では従来の動名詞は3種類に分けられているが、本稿では、AからLまでの12種類に分



けている。(3)の表に加えて、(4)で、(仮)名称と代表例をあげておこう。

- (4) A. adverbial gerund (I went fishing. Jane said she would come fishing with us.)
- B. passive gerund (It needs washing. My shoes want mending.)
- C. nominal gerund (His rapid drawing of the picture fascinated me.)
- D. “noncontrolled” activity gerund (Pulling the little girl’s hair made her mad.)
- E. “implicitly controlled” activity gerund (Hunting elephants can be dangerous.)
- F. “explicitly controlled” activity gerund (Sue avoids serving white wine with fish.)
- G. infinitive gerund (John continued going to college.)
- H. generality gerund (I don’t like his having made such a mistake.)
- I. fact gerund (I regretted (the fact of) his having given money to John.)
- J. act gerund (Bernie’s running away from the bear was wise.)
- K. accusative with gerund (Both of them being stolen was a shock.)
- L. nominative with gerund (He being absent complicates matters.)

これらの各グループは、同一基準で分類されたものではなく、様々の特徴を持っているが、何らかのグループをなしているものであり、以下、一つ一つ、(4)の各グループが、(3)の表のように位置づけられていることを述べていきたい。なお、(3)の表の実線は、決して正確なものとは言えないが、各種の動名詞が、他の範ちゅうと重なり合う程、多様であるという点に特に注意してして載きたい。

3. 各論

3.1. Adverbial Gerund(A)

adverbial gerund という言い方は Stockwell, Schachter and Partee (1968, 1973) でも用いているが、彼らは I saw him coming に於ける 現在分詞などもいっしょにして、そう呼んでいる。しかし、ここでは、go, come のような動詞といっしょに使用される動名詞のみに限定しておく。この -ing を現在分詞とする文法書も少なくないが、

- (5) He is going $\left\{ \begin{array}{l} \text{drinking} \\ \text{beer-drinking} \\ \text{*drinking beer} \end{array} \right\}$.

beer-drinking のような複合名詞化されたものもあること、及び、Emonds (1973) の Double *ing* surface constraint⁽³⁾ (表面構造に、Ving の連続がある時、その間に NP の境界がなければ、その連続は非文法的であるとする出力条件) にブロックされない例としてあげてあること、さらに歴史的に見ても go と -ing の間に前置詞がかつては存在したことなどから、(5) のような文の -ing はやはり動名詞であると考えられる。

- (6) Sue's gone hunting $\left\{ \begin{array}{l} \text{*bears} \\ \text{for bears} \end{array} \right\}$.

- (7) We went $\left\{ \begin{array}{l} \text{*having danced} \\ \text{dancing} \end{array} \right\}$.

- (8) We're going (*our/good/some/no) skating.

この adverbial gerund は (5), (6) でわかるように、目的語を伴わず、(7) のように完了形もつかないことから、Wasow and Roeper (1972) のいう

Verbal gerund (動詞的動名詞) でないことは明らかである。さらに, (8) でみるように, 意味上の主語はもとより, いかなる修飾語も付けられないという点で, 動名詞の中では, もっとも, 使用範囲が少なく, いわゆる生産性 (productivity) が低いものである。なお, adverbial というのは, この動名詞の文中の機能を表現したもので, 例えば, “I am going fishing.” は, “What are you going?” の答というより “Where are you going?” の答であるという事実に基づいている。(4)

3.2. Passive Gerund (B)

このグループは次のような動詞の目的語としてあらわれる。

(9) need, want, (waon't/wouldn't) bear, endure, intend,...

次の例でわかるように, 動名詞を使用しない方言も存在する。(5)

- (10) This blouse needs

{	pressing. (Standard English, most American dialects)
	to be pressed. (most American dialects)
	pressed. (Standard Scottish English, western Pennsylvania)

この動名詞はまだ名詞性の強かった頃の名残りの用法であるが, 次に見るように, 形容詞や no がつくという点で, 後出する名詞的動名詞の一種といえる。

- (11) a. His wife needs tactful handling.
b. That needs no accounting for.

しかし, (12)や(13)のように, 意味上主語や目的語は, たとえ of をはさんでも, 一切つけられないという点で, 名詞的動名詞よりは使用範囲が狭くなっている。

- (12) *His wife needs her tactful handling.
(13) *My camera needs mending (of) it.

ただし, A の Adverbial gerund よりは, (11) のような文が可能な点で, 生産性が高いと言える。従って, (3)の表ではBの方がグラフが長くなっているが, Bの()の部分, 次のような複合名詞化した例を容認する話者

が多少存在するためである。

- (14) His wife needs beer-drinking.

3.3. Nominal Gerund (C)

Nominal gerund (名詞的動名詞)の特性は、次にまとめてあるが、()内は動詞的動名詞の特性で、これらの相違については、Lees (1960), Wasow and Roeper (1972) など変形文法学者だけでなく、Curme なども指摘していたことである。

- (15) a. *loud* singing (singing *loudly*)
b. *a* reading of The Bald Soprano (reading The Bald Soprano)
c. *the* killing of his dog (killing his dog)
d. sightings of UFO's (sighting UFO's)
e. *no* acting (*not* acting)
f. diving (*having* dived)

ただし、(15) a の名詞的動名詞には副詞が使用できないという指摘には、個人差が多少見られる。(6)

- (16) a. The firing of the gun continually...(Ross)
b. *His driving of a car continually...
c. His driving of the car continually...
d. His driving of the car when (he is) sleepy...
e. ?His driving of the car after he bought it...
f. ?The driving of the car continually...

これらの表現は全て否認する話者が多いが、中には c. d は容認する話者もいる。a を認める話者 (Ross など) は、c. d も認めるものと予想される。つまり、名詞的動名詞に、様態や時間の副詞が使用できる話者の場合、より生産性が高いわけで、(3)では () で示している。しかし、名詞的動名詞には、形容詞がつけられること、冠詞がつけられること、目的語との間に of が必要なこと、複数形もありうること、not でなく no を使用すること、などの特徴があり、これらは動詞的動名詞にはない。従って、現代英語では、名詞的動名詞と動詞的動名詞には、かなりの明確な差違が存

在しており、実際、(3)でも、Ross のテストは24点を示している。変形文法理論に於いても、既に述べたように、この両者に対し、異なる基底構造を与える考えの強かったことには充分の根拠があったのである。

(16)のように、両者の中間性を示す用法は、英語史を遡るともっと豊富で、18世紀頃までは、the shooting birds や shooting of birds 式のものも存在したわけで、その頃は、名詞的動名詞と動詞的動名詞の境界は不明確で、もっと連続的であったと考えられる。⁽⁷⁾

- (17) a. *His resembling of his mother (stative verb)
 b. *His considering of her silly (objective complement)
 c. *John's giving of Mary the book (indirect object)
 d. *His looking of the information up (particle movement)
 e. *The arguing about money (prepositional verb)
 f. *The taking of advantage of him (idiom)

(17)にまとめた非文は、⁽⁸⁾ Lees (1960) や Fraser (1970) らの指摘によるもので、名詞的動名詞には構文上の制約が多く、次節以下でとりあげる動詞的動名詞と比較して、生産性がかなり低くなっていることがわかる。勿論、adverbial gerund や passive gerund に比べて、生産性が高いことは言うまでもない。

3.4. "Public" predicates のとる "noncontrolled" activity gerund と "private" predicates のとる "implicitly controlled" activity gerund 及び "explicitly controlled" activity gerund (D,E,F)

本節以下は全て動詞的動名詞の一種であるが、この節では Thompson (1973) の述語の分類を一応受け入れて、(18)のように、意味上主語や助動詞成分のつかないものを activity gerund と呼んでおく。

- (18) Eating vegetables is healthful.

D の "noncontrolled" activity gerund というのは、Thompson のいう "publicness" を、補部の動名詞に要求する public predicate⁽⁹⁾ とあらわれらるもので、次の文がその例であるが、動名詞の意味上の主語は文中のどこ

にも表現されていない。

- (19) a. Pulling the little girl's hair made her mad.
b. Fred (dis) approves of opening up trade with Albania.

それに対して、E. と F の activity gerund は implicit か explicit かの違いはあっても、動名詞の意味上の主語が、文中の名詞句によって control されていると考えられるもので、“privateness”をもった述語といっしょにあらわれる。

- (20) a. (A_i 's) Hunting elephants can be dangerous (for A_i).
b. Getting together quickly for coffee would be fun.
(21) a. Sue avoids serving white wine with fish.
b. I abhor singing operas.

(20) は “implicitly controlled” の例で、Hunting elephants する人にとって dangerous なのであり、(21) は “explicitly controlled” の例で、serve する人は明らかに Sue である。

以上のような Thompson の分類を、本稿では、(3)の表のように、文らしさに差がありと判定したのであるが、その根拠を次に述べたい。以下の議論は、三つとも、controlled gerund よりも noncontrolled gerund の方が名詞性が強まることを示すものである。

- (22) a. I like singing.
b. I abhor singing.

第一にとりあげる例は、(22)のように自動詞が動名詞になっている場合で、一見、名詞的動名詞か、動詞的動名詞か判定し難い。実は両方になりうるもので、noncontrol の解釈の時が名詞的動名詞であるという議論が Wasow and Roeper (1972) にある。control の解釈だと動詞的動名詞になるが、singing の後に直接、the song などの目的語を付けた解釈が control のみになることからわかる。

- (23) a. We imagined singing old songs { i. as being fun for some people.
ii. but were afraid to try.

- b. The doctors visualized playing the piano $\left\{ \begin{array}{l} \text{i. as good therapy.} \\ \text{ii. but really didn't} \\ \text{know how.} \end{array} \right.$

第二の議論は、Horn (1975) の (23) のような文の議論に基づくもので、個々の例には個人差があるものの、もし彼の分析が正しいとすれば、本稿での支持的証拠として利用できるものとなる。(23)に於いて、i の解釈も可能な話者にとっては、その動名詞は noncontrol であり、ii の解釈の場合、control されているが、Horn は、両者は異なった基底構造を持つべきであると主張している。

- (24) a. What did we imagine singing ϕ ?
b. What did the doctors visualize playing ϕ ?

(24)は動名詞句の中から WH 句を取りだしたものであるが、この場合、control の解釈しか成立しないという。つまり、noncontrol の場合は内部構造も名詞的なので extraction が不可能となるわけである。

Horn の議論も、以上の部分に関しては問題がないと思われるが、彼の結論は、動名詞付対格構文をとるものが、基底構造を文であるとし、所有格のついたものは内部構造も名詞であるとしている。しかも、動名詞の意味上の主語が表面に表われない場合、control の解釈となる動名詞はもともと対格で、noncontrol の解釈だともともと所有格の構文であったとしている。これには問題点が生ずる。もともと、noncontrol でありながら対格のつく例があれば、Horn への反例となるが、次のような文が存在している。

- (25) a. I forbid $\left\{ \begin{array}{l} \text{you} \\ \text{your} \end{array} \right\}$ entering the room.
b. I approve of women smoking.

逆に、(23)の imagine の場合は、人によっては、所有格用法だけしか使用せず、しかも、control の意味しかとれないという。つまり、両面からの反例が見つかるわけで、Horn の二分法はあまりに単純すぎると言わざるをえない。

(26) We remembered $\left\{ \begin{array}{l} \text{John's} \\ \text{John} \end{array} \right\}$ kissing Mary.

このような文では、'S 付きなら Cleft Sentence や Topicalization で John's kissing Mary は前置可能だが、対格の場合は不可になるという。従って、Horn の提案では (26) のような文は、対格でも所有格でも文意は全く変わらないのに、それぞれ文からの変形によるものと、もともと内部構造も名詞句であるものとに分類され、全く別の基底構造を付与されることになる。これは、理論によっては許されることかも知れないが、従来の変形文法ではやはり好ましいことではないだろう。それに、'S 付きでないと、Cleft Sentence は作れないという Horn の観察も妥当なものではない。

(27) a. It was Bill('s) kissing Mary that everyone imagined.

b. It was them being so all-fired snooty that I objected to.

(27) のような対格の例を認める話者は少なくないし、次のような例に関して、Horn は上昇目的語の場合対格のついた動名詞句は Topicalization 可能と言っているが、今までたずねた10人位のアメリカ人は、一人も容認しなかった。

(28) John('s) failing the test we considered ϕ to be horrible.

以上のように不安定な例文をもとに、基底構造を二分した Horn の結論には、問題があると言ってよいであろう。(10)

(26) や (28) のような文が、前置変形などで容認性の差違を示すという現象は、恐らく、Perception レベルのことがらが、かなり深く関係しているのではないと思われる。つまり、'S 付きだと全体の結合力が高くなるので、一つのユニットを成して、移動なども対格の場合より自由になるのではないだろうか。しかも、このユニット性の度合いには当然個人差も予想されるが、そういう例が実際見つかるのである。

(29) a. That Bill was a fool we imagined ϕ .

b. *Bill ('s) kissing Mary everyone imagined ϕ .

(29) b は 'S 付きなら Horn は OK としているが、一人の米国人⁽¹¹⁾は、(29) b を一切認めず、むしろ (29) a の方を選んだ。他の文でもいろいろテストした

結果、この話者には、文頭に補文標識のある(29) aの方がユニット性が高く感じられることがわかった。従って、次の(30) aも容認することになり、いわゆる *interal sentence* の容認性にも個人差が存在することになり、出力条件や *perception rule* の類にも個人差を認めたいうでの定式化が必要となろう。

- (30) a. I believed [that the earth is round] to be obvious to everyone.
 b. I believed [the earth('s) being round] to be obvious to everyone.

Horn の論文に対する反論はそれ位にして、話をもとに戻そう。

第三の議論は、やはり、*control* に関するもので、次の(31) a は *control* の解釈（自分達がビールを飲む）と *noncontrol*（警官以外の人達が飲んでいる）の解釈が両方成立する。

- (31) a. The police stopped drinking beer on campus.
 b. The police were stopping drinking beer on campus. (*noncontrol*)
 c. Drinking beer on campus was stopped by the police. (*noncontrol*)

ところが(31) b は、*noncontrol* の解釈だけとなり、再び Emonds の *Double ing surface constraint* でブロックされない例となる。つまり(31) b の *stopping* と *drinking* の間には NP の境界があることになるが、(31) a の *control* 解釈では NP の境界がないことになる。(31) c についても、やはり受身文になるのは、*noncontrol* の場合だけであり、*stop* という他動詞の目的語として、名詞構造を持っていることになる。

以上で、例文(2)から開始した三つの議論は終了することになるが、要するに、*controlled gerund* よりも、*noncontrolled gerund* の方が、常に、NP の性格が明確になっているということが以上で証明されたと思う。つまり、逆に言えば、*controlled gerund* の方が、名詞的性質が弱く、文らしさ、動詞句らしさがより強いと考えてよいだろう。ただし、本稿の問題点として残るのは、E の“*implicit control*”と F “*explicit control*”との差を証明する方法が今のところ見いだせないことであるが、E の *implicitly controlled activity gerund* の方は *noncontrol* と *explicit control* との間であろうという推測に基づいている。

3.5 Temporal. Predicate のとる Infinitive Gerund(G)

次に G の Infinitive gerund の例として(32) a をあげておく。

(32) a. John continued going to college.

b. John continued to go to college.

このタイプは次のような時間表現の動詞と共に生ずるものである。

(33) begin, start, commence, continue, cease, recommence,...

このタイプの -ing については異論が多く、最近の Vⁿ 分析でも、一般の gerund とは別に V¹ の Complement としている。⁽¹²⁾ 村田(1975)では、少なくとも、文主語から変形された(32)のような文について述べたが、Perlmutter (1970) は文主語から派生されるものと、時間動詞の後に補文があったとするものとの二種類の構文の存在を主張しており、この後者に関して、Perlmutter は、これらの動詞が他動詞であり、動名詞句が目的格補文であるとの主張は行っていない。⁽¹³⁾ つまり、後者の構造に関しては疑問を残したままにしているのであるが、“John began the job.” など、明らかに他動詞であり、いずれにしろ begin 類に他動詞用法は存在するのであるから、特に生物が主語になる場合の用法を本稿では他動詞+動名詞句と考えておく。従って無生物主語をとる “It began raining/to rain.” のような例は、村田(1975)のように文主語から派生されたものと考えたい。⁽¹⁴⁾

話を(32)に戻そう。(32) a と(32) b が、同じ意味であるとする人と、多少、ニュアンスが異なるとする人と両方いる。⁽¹⁵⁾ 両者が同じ意味や用法しかない話者にとっては、これらは言わば「自由変異」の関係にあり、(3)の表ではそれが () で表示してある。infinitive gerund の呼名はそこに由来している。

この infinitive gerund は主語名詞によって control されており、F の “explicitly controlled” activity gerund と一見区別がつかないが、後者の activity gerund を従える consider を用いた文と、(32) a を比較してみよう。

(34) a. Going to college was considered by John.

b. *Going to college was continued by John.

(35) a. John considered [the marine corps and going to college].

b. *John continued [the story and going to college].

③4)は、受身文になる activity gerund の方は動名詞が、consider の object として名詞的機能を持っているが、continue の方はそうではなく、③5)は、同様に、activity gerund は普通名詞と等位構造を形成するのに、infinitive gerund の方は不可能となっており、F の activity gerund の方が G の infinitive gerund よりも名詞性が強いことを示すと言えるだろう。

③6) a. *John continued his/their polishing the yoyo.

b. *John continued having polished the yoyo.

③6)は、G の gerund には、意味上主語や、助動詞が一切、付加できないことを示しており、次の節より後に述べる動名詞に比べれば、文らしさが低いと言えるであろう。

③7) a. *[For that you have to go to Kuhkaff to be unpleasant] is understandable.

b. ?*[For you having to comb your bed-mate to be unpleasant] is understandable.

c. ? [For your having to comb your bed-mate to be unpleasant] is understandable.

d. [For having to comb your bed-mate to be unpleasant] is understandable.

e. [For your feelings toward Mildred to be unpleasant] is understandable.

③8) a. ?? Eloise, [our renominating [whom]] } may prove counterproductive, can sing in several
 b. ? Eloise, [renominating [whom]] } keys simultaneously.

③7), ③8) は Ross (1973, p.152 and p.178) からの例で、表層構造で、意味上主語のつかない動名詞 (i.e., ③7) d と ③8) b) の方が、意味上主語のついている動名詞よりも名詞性が高いことを示すと言えよう。特に、③7) c と ③7) d の差及び、③8) a と ③8) b の容認性の差に注目したい。

3.6. Emotive Predicate のとる Generality Gerund (H)

H の generality gerund というのは、(39)のように、意味上主語や完了形 having をつけられる点で、G までの動名詞に比べて、一段と文らしさが向上していることになる。

(39) I don't like his having made such a mistake.

このグループは、次のような Emotive predicate⁽¹⁶⁾ のあとにくる動名詞に共通に見られる特徴である。

(40) like, love, hate, prefer, dislike, stand,...

これらの動詞は、次の例のように不定詞構文も使用できる。

- (41) a. She likes having breakfast in bed. (frequent or regular enjoyment)
b. She liked to have breakfast in bed. (occasional, enjoyment of something rarely occurring.)

(41)の()内の説明は Bladon (1968) によるものであるが、これと同様の説明は普通の文法書にもよく見られる。⁽¹⁷⁾ このように動名詞構文は「一般性」を示し、不定詞構文が「特定行為」を示すというのは、あらゆる話者に必ずしも意識されているわけではないように思われる。ただし、emotive predicate や、次のような形容詞の後では、比較的、多くの人が、差違を認めるようである。⁽¹⁸⁾

(42) I was afraid { of bathing there.
to bathe there.

表(3)では、(41) a. b のような差を認めない話者も、私の調査では存在したので、() でそれを示している。表(3)の実線が、D, E, F, G よりもさらに右よりになっているのは、既に述べたように、(39)のような例文のためである。⁽¹⁹⁾

3.7. Factive Predicate のとる Fact Gerund (I)

I の fact gerund というのは、Kiparsky and Kiparsky (1970) の指摘した factive predicate⁽²⁰⁾ と共に使用される動名詞を仮にこう呼んだもので、次の例のように動名詞句の前に the fact of を付加しても意味的に矛盾が生

じない。

- (43) (The fact of) her having solved the problem is significant.

これらの動名詞には、意味上の主語や完了形が使用できるだけでなく、次のように、that 補文で言い変えても、意味が変わらないという。つまり、自由変異であり、that 補文と同等の機能を持つ、文らしさの高い動名詞構文と言えるであろう。

- (44) a. I regretted her having contemplated her navel for so long.
b. I regretted that she had contemplated her navel for so long.

H の generality gerund との差は、(3)でも表示しているように、この that 補文との交代性にあると言ってよい。文らしさの平均値が、これによって多少、向上していると考えてもよいであろう。

3.8. Class W Adjective のとる Act Gerund (J)

J の act gerund と名づけた動名詞は、Wilkinson (1974) が class W Adjective と呼んだ形容詞類と共に生ずる動名詞構文のことである。(45)はそのリストの一例で、(46)は例文である。

- (45) wise, clever, foolish, stupid, kind, polite, brave, cute, homest, careful, ...
(46) Bernie's having run away from the bear was wise.

この構文の特性については、既に村田(1975)でも取りあげたので、ここでは省略するが、次に見るように形容詞の後に前置詞 of が使用されるのが特徴であるが、重要なのは、(47) b, c でみるように、for to 構文と、that 補文で、意味を変えずに書き換えが自由であるという点である。この点で、表(3)で示すように、fact gerund よりも右方に於いて実線部分が長くなっており、文らしさの平均値はやや向上していると言えるであろう。

- (47) a. Bernie's running away from the bear was wise of him.
b. For Bernie to run away from the bear was wise of him.
c. That Bernie ran away from the bear was wise of him.

なお、この act gerund という名称は、I の fact gerund に the fact of が

付加できたのに対し、次にみるように、the act ofの方がマッチするということに基づくものである。

- (48) a. *The fact of the boy's helping the girl was wise.
b. The act of the boy's helping the girl was wise.

3.9. Accusative with Gerund (K) と Nominative with Gerund (L)

K と L は、特定の述語類と生ずるグループではなく、形態上の特徴に基づく分類である。今まで登場した動名詞は全て、意味上の主語をとる場合、代名詞であれば所有格を用い、普通名詞であれば'sを付加してきた。しかし、次にあげるような例は、目的格（対格）ないし、通格でないと正しい英語にはならない。

- (49) a. I was surprised at this (*'s) happening to me.
b. Both of them(*'s) being stolen was a shock.
c. There was no sign of there(*'s) having been a struggle.
d. We imagined the refrigerator (?'s) falling down the stairs.
e. We were surprised at men (?'s) approving of women's lib.⁽²¹⁾

すなわち、aのような指示代名詞や、bのような語群、cのthere構文、dの無生物名詞、eの総称用法の名詞などは普通'sを付けると不自然である。(50)のように人称代名詞の場合は、目的語の位置では、今や目的格の方が普通になっている程、多用されるが、主語の位置だと、やはり所有格の方を好む人が多い。次の例を見て載きたい。

- (50) I don't like [him having made such a mistake].
(51) a. [It(s) being muggy yesterday] kept them out of the cellar.
b. [His/Him not preparing dinner] is good for her health.

ただし、Ross (1973) は、(51) a, b のような文でも、所有格より、目的格の方を好むという。

しかし、いずれにしろ、(49)のように、所有格を伴う動名詞構文に多くの制約が存在することは事実であり、Jまでの動名詞構文は意味上主語の選択制限がきついという点で、生産性は、動名詞付対格よりも大きく劣ると

言えるであろう。⁽²²⁾ その点、Ross (1973) は、(3)の表でも示したように、*Poss Ing* よりも *Acc Ing* の方を右側に置いたのは納得ができる。Ross はこの両構文に関する多くのテストをあげているが、次の例もその一つで、名詞性を要求される構文では、逆に、動名詞付対格よりも所有格を伴う動名詞の方が容認性が高く、従って、名詞性も高いと言えるであろう。

- (53) a. *Was [that the boss had warts] rumored?
 b. ??Was [for him to enter nude] unexpected?
 c. ?Was [him entering nude] a shock?
 d. Was [Jack's applauding] appreciated?
- (54) a. *I found [that Ron had lied to us like that] disgraceful.
 b. ?*I found [for Ron to lie to us like that] disgraceful.
 c. ?I found [Ron lying to us like that] disgraceful.
 d. I found [Ron's lying to us like that] disgraceful.

目的格を用いることによって、意味上主語はより自由になり、文らしきは一層向上したわけであるが、普通名詞の場合、実は、目的格なのか、主格なのか、あいまいになるケースが当然生じてくるものと思われる。実際、乾 (1954, p. 72) は、次のような例を主格と考えている。

- (62) a. [Women having the vote] reduces men's political power.
 b. [Today being Sunday] rather complicates matters.
 c. [He being absent] rather complicates matters.

(62) a, b は普通の対格 (というより、むしろ通格と言うべきか) ともとれるが、しかし、もし(62) c のような形が、たとえ、一部の方言や俗語にしても、存在するならば、それは、動名詞構文が普通の「文」の方向に向かって発達してきた流れの中で、言わば、終点とも言えるものになるであろう。本稿では、乾 (1954) と同様、これを動名詞付主格と考え、グループ L として、表(3)に於いて、*Acc Ing* よりも右よりに置くと共に、一部の人のみによる表現だとして () で囲んでおいた。Curme (1931, p. 490) は次の例で、a の方を *literary* とし、*gerund* であるが、b の方は *colloquial* で現在分詞であるとしているが、本稿では、両者、同じ意味であり、b の方が、まさに L の *nominative with gerund* の例であると考えたい。⁽²³⁾

-
- (5) a. [His saying he is sorry] alters the case.
b. [He saying he is sorry] alters the case.

4. 結 語

以上から、英語の動名詞は、名詞や派生名詞と同等の機能を果たすものから、逆に、for to 構文や that 補文と同じ機能を果たすものまであって、実に、表現能力の幅が広いものであることがわかった。従って、(3)の表に関して言えば、AからLまでの動名詞グループには、名詞性（または、文らしさ、ないし、動詞句らしさ）に差があると言えるだけでなく、動名詞以外の範ちゅうと重なり合っている部分もあるという点が重要であろう。これらの動名詞に見られる複雑な方言差や種類を、明確に記述、説明するのは、現代の新しい言語理論のわく組み内でも、決して容易であるとは言えない。「例外」として切りすてられることのないような（または、少ないような）文法をつくる作業は、まだ、完成からはほど遠い状態にあるといえるだろう。

(1980年7月23日)

注

(1) 本稿は、もともと、1976年11月7日、第1回大阪（外大）言語学研究会研究発表大会で、「英語の動名詞再考」と題して口頭発表したものであるが、（その時の要旨は英文で大阪外国語大学発行 *Nebulae* (1977年号) にあり）今回、多少の修正と新しい議論を加えて発表するものである。関連した研究も口頭の形で別の会でも発表した。何人かの方から貴重な助言を戴いた。データの確認も、サンディエゴ州立大や同僚の米人教師にお願いしたが、特に、Andrea Safir, Luda Matiash, Peter Garlid, Lucinda Berry, Calvin Jager らの諸氏とは長時間の議論をつきあって戴き、深く感謝の意を表したい。

(2) 杉山 (1975) は、Rossの Nouniness に関するテストが「“that から noun までの八つの範ちゅうすべてにOKを示すような種類の統語的なテストが発見されない限り、上で言及した二つの接近法（つまり、名詞を軸とした接近法と文を軸とした接近法）によって認められる二つの連続性が、同一直線上にあるとは必ずしも言い切れないから” Rossの主張は必ずしも正しくないように思われる」と述べてい

る。しかし、例えば、主語や目的語になれるかどうか、というテストなどは、that から名詞まで全てOKになることは明らかで、やはり、共通に名詞的機能を大なり小なり持っていると言えよう。

その他、井上 (1976) の「序」にも、連続性の仮説に対する批判が見られる。

このように、幾つか批判はでているけれども、Ross 自身は、1978年冬、ICU で連続講演を行なった後のプライベートな場面では、文法における連続性の考えをすてているように思えず、幾つか具体例を出して語っていた。

今回の参考文献表にあげていないが、彼は、連続性に関連した論文を他にもかなり発表しており、それらをまとめた単行本の出版予定もあることを聞いている。

(3) 中村 (1974) は、二重 Ing 制約に関して、Ross (1972), Emonds (1973), Milsark, Pullum らの提案のうち、Emonds の出力条件が一番優れた説明方法であると述べている。

(4) go などの後にどのような動名詞が使用できるかについての考察は Silva (1975) 参照。ただし、彼女はこの ing が動名詞か現在分詞かについてはふれていない。

(5) Trudgill (1974) の p. 18 など参照。

(6) (16) a の文を容認可能としたのは J. R. Ross で、東京で、直接彼から聞いたものである。

(7) 例えば Jespersen (1940) の、VIII, IX 参照。

(8) 安井 (1973) に良いまとめがあり、これを参照した。

(9) 動詞のリストは Thompson (1973) の Appendix 参照のこと。次の private predicate についても同様。

(10) Schachter (1976) も、Horn と似た提案をしているが、十分な議論を展開していない。

(11) カルフォニア大学パークレー校とソルボンヌ大学大学院を修了した教養豊かな女性で、かつて京都大学でも教えていた。

(12) Akmajian, Steele and Wasow (1979) 参照。彼らは、see のような感覚動詞のとり-ing も同じ V¹ レベルで導出しているが、これらの-ing が何者なのかについては明言していない。

(13) Perlmutter (1970) は、(32) b の不定詞句の場合だけを論じており、(32) a のような動名詞句については何もふれていない。村田 (1975) 及び本稿では、動名詞構文も同じように扱っている。

(14) 実際に含まれる文は、村田 (1975) と、今回ではかなり異っていることに注意。

(15) 異なる場合については、研究社「新英和中辞典」の begin の項の解説とか、村田 (1975) など参照。

(16) Kiparsky and Kiparsky (1970) 参照。

(17) 例えば, Palmer (1965, 1974) など参照。

(18) 形容詞のこのような差についての議論は, 村田 (1977) の5節で多少詳しく扱った。

(19) (39)では動名詞の主語を所有格にしているが, 英国系の文法書は, むしろ目的格の方を優先させている場合が多い。学校文法の影響で, 動名詞の主語は所有格の方が好ましいと思込んでいるアメリカ人もいるが, 実際には, 目的格が多く使用されている。

(20) *factive predicate* のリストは Kiparsky and Kiparsky (1970) にあり。

(21) a-c は Schachter (1976) より。d と e は Horn (1975) から引用。

(22) 3.3. の(17)でも, 動詞的動名詞に比べて名詞的動名詞には多くの制約があり, やはり生産性が低いことを指摘したが, ここでも同様, 多くの制約があり, Ross が動名詞を三分割した上で, 連続性を指摘していることにも, 根拠はあると言える。

(23) (52)a や (53)b のような例は, Curme (1913) の p. 157 でも扱っており, *Nominative absolute* (絶対主格) と呼んで, やはり現在分詞と考えている。

脱稿後に, 榊原弘章 (1980), “知覚意味と補文選択,” (開拓社「英語学 第22号」) にあり) を入手した。彼は, (52)a や (53)b のような例は所有格でも言いかえられるし, どちらも動名詞構文と考えており, 本稿とその点では同じ立場である。ただし, 榊原論文の主旨は,

(i) Bill took a picture of John playing the piano.

(ii) John killing Mary was a horrible sight.

のように, 「知覚」を意味する名詞や述部と共起する *ing* 形は, 動名詞ではなく, 現在分詞であるとし, 梶田 (1967) の S⁴ と同等の補文であると主張している。つまり,

(iii) I saw Mary crossing the street.

の *ing* と同じと考えているわけである。もし, この主張が正しいとすれば, 本稿の動名詞付対格(K)や動名詞付主格(L)の例と, 一見, 混同が生じやすいが, しかし, 主文の述部や同格名詞に「知覚」の意味を持つ例文を除外して考えればよいわけで, 本稿の主旨には何の影響もないといえる。(49)は, その点, 「知覚」を表わす文と取れなくもないので, もしかすると榊原の考えでは, 現在分詞になるものができるかも知れないが(彼のリストや, 「知覚」の定義が完全に明解であるという訳ではなく, (49)のような例がどちらになるのか不明である), しかし, (49)a から e までに基づいて述べた動名詞付対格に対する制約の存在は事実であり, 他の適当な述部を使用すれば, 本稿の論点には問題はないことになろう。

対格名詞句で始まる *ing* 表現の全てが動名詞構文という訳ではないことを指摘し

た点、榊原の論文は秀れていると思われるが、Horn (1975) の分析が明らかに誤ったものであるとまで言いきっているのは、少し言い過ぎであろう。榊原の論点からすると、Horn の動名詞構文の例文の中に、「知覚」表現のものが混入していたことのみが、問題点として指摘されたことになるのであるから…

参考文献

- Akmaijan, A., S.M. Steele and T. Wasow (1979), "The category AUX in universal grammar," in *Linguistic Inquiry* 10, 1, pp. 1-64.
- Bladon, R.A. (1968), "Selecting the *to* or *ing* nominal after *like*, *love*, *hate*, *dislike* and *prefer*," in *English Studies*, 44, 3, pp. 203-214.
- Chomsky, N. (1970), "Remarks on nominalization," in Jacobs and Rosenbaum (eds.) *Readings in English Transformational Grammar*, pp. 184-221.
- Curme, G.O. (1912), "History of English gerund," in *English Studies*, 45, pp. 349-380 (小林淳勇訳, (1958), 動名詞の発達。研究社)
- , (1931), *Syntax*. D.C. Heath and Co.
- Emonds, J.E. (1973), "Alternatives to global constraints," in *Glossa*, 7, pp. 39-61.
- Fraser, B. (1970), "Some remarks on the action nominalization in English," in Jacobs and Rosenbaum (eds.), pp. 83-98.
- Horn, G.M. (1975), "On the nonsentential nature of the POSS-ING construction," in *Linguistic Analysis*, 1,4, pp. 333-387.
- 井上和子 (1976), 変形文法と日本語 (上)。大修館。
- 乾亮一 (1954), 分詞・動名詞。研究社。
- Jespersen, O. (1940), *A Modern English Grammar*, Part V. George Allen and Unwin.
- Kajita, M. (1968), *A Generative-Transformational Study of Semi-Auxiliaries in Present-day American English*. Sanseido.
- Kiparsky, P. and C. Kiparsky, (1971), "Fact," in Steinberg, D. D. and L.A. Jakobovits (eds.), *Semantics: An Interdisciplinary Reader in Philosophy, Linguistics, Anthropology and Psychology*. Cambridge U. P.
- Lees, R.B. (1960), *The Grammar of English Nominalizations*. Mouton.
- 村田忠男 (1975), "英語深層文型の一試案 (II)," in 梅光女学院大学英米文学研究第11号,
- , (1977), "英語深層文型の試案 (III)," in 梅光女学院大学英米文学研究第13号
- 中村捷 (1974), "分離的文法と非分離的文法," in 英語文学世界 7月号, 英潮社

- , (1974), “派生制約か出力条件か,” in 英語文学世界11月号, 英潮社
- Palmer, F.R. (1965), *A Linguistic Study of the English Verb*. Longman.
- , (1974) *The English Verb*. Longman.
- Perlmutter, D.M. (1970), “The two verbs *begin*,” Jacobs and Rosenbaum (eds.) pp. 107–119.
- Ross, J.R. (1972), “Double-ing,” in Kimball, J.P. (ed.) *Syntax and Semantics*, 1, pp. 157–186.
- , (1973), “Nouniness,” in Fujimura (ed.) in *Three Dimensions in Linguistic Theory*. pp. 138–257. TEC.
- 榊原弘章 (1980), “知覚意味と補文選択,” in 英語学第22号, pp. 89–100. 開拓社.
- Schachter, P. (1976), “A Nontransformational account of gerundive nominals in English,” in *Linguistic Inquiry*, 7,2, pp. 205–241.
- Silva, C.M. (1975), “Adverbial Ing,” in *Linguistic Inquiry*, 6, pp. 346–350.
- Stockwell, R.P., P. Schachter and B.H. Partee, (1968), “Integration of transformational theories on English syntax.” (Revised in 1973, *The Major Syntactic Structures of English*. Holt.)
- 杉山融 (1975), “Ross の Nouniness について,” in 英語学第13号, pp. 76–85. 開拓社.
- Thompson, S.A. (1973), “On subjectless gerunds in English,” in *Foundations of Language*, 9, pp. 374–383.
- Trudgill, P. (1974), *Sociolinguistics: An Introduction*. Penguin Books.
- ヴァン デル ガーフ (1928) *The Gerund preceded by the Common Case. A Study in Historical Syntax*. (山川喜久男訳 (1959), 通格付き動名詞構造の発達. 研究社)
- Wasow, T. and T. Roeper, (1972), “On the subject of gerunds,” in *Foundations of Language*, 8, pp. 44–61.
- Wilkinson, R. (1974), “Factive complements and action complements,” in 安井稔編海外英語学論叢1974年版, pp. 52–81. 英潮社。
- Williams, E. (1975), “Small clauses in English,” in *Syntax and Semantics*, 4, pp. 249–273.
- 安井稔, (1973), “動名詞の解体と再構,” in 英語学第10号, pp. 2–24. 開拓社。
- , (編) (1975), 海外英語学論叢 1975 年版, 英潮社。